

富山大チーム 米医学誌に発表

生まれ順で乳児に発達差

同じ母親から生まれた第1子と第2子を生後6カ月時点で比べると、第2子で発達の度合い

が低い傾向があったとする研究結果を、富山大などのチームが米医学誌に発表した。保護者の

関わりが第2子で少ない傾向もあり、発達差に影響した可能性がある。生後12カ月で差は縮小していた。

学童期以降で第1子の学力が高いなどとする研究は過去にあったが、乳児を対象にした研究は珍しい。

環境省の「子どもの健康と環境に関する全国調査（エコチル調査）」のデータを使い、最大

で3歳差のきょうだい2117組を分析した。

チームは、高い声を出せるなどの「コミュニケーション」、全身を使う「粗大運動」、物をつまむ「微細運動」、隠した物を探すかどうかといった「問題解決」、ボール遊びのやりとり

など「個人・社会性」の5領域について60点満点の発達スコアで比べた。

すると、6カ月では全ての領域で第2子のスコアが低い傾向がみられ、平均して個人・社会性で約14点差、微細運動で約6

点差があった。12カ月では、それぞれ約5点差と約4点差に縮まり、その他の領域ではほぼ差がなくなっていた。読み聞かせや屋外活動などで保護者が関与する度合いも調べると、第2子で低い傾向があった。

12カ月で差が縮小したのは、きょうだい間の交流が第2子の発達を促し、第1子との間で分散しがちな親の関与を補っている可能性がある。

富山大の土田暁子助教（公衆衛生学）は、こうした傾向は全ての親子に当てはまるものではなく、差も大きくはないと強調。

「生後12カ月以降の成長に伴う変化は分らない。追跡調査が必要だ」と述べた。

保護者の関与度影響か